

宿命

「よど号」 亡命者たちの 秘密工作

Takazawa Kôji

高沢皓司

日本航空



新潮文庫

しゆく
宿

めい
命

—「よど号」亡命者たちの秘密工作—

新潮文庫

た - 66 - 1



平成十二年八月一日発行

著者 高 沢 皓 司
たか ざわ こう じ

発行者 佐 藤 隆 信
さとう たかひろのぶ

発行所 株式 新 潮 社
しんしやうしゃ

郵便番号 一六二一八七一
東京都新宿区矢来町七一
編集部(〇三)三二六六―五四四〇
電話 読者係(〇三)三二六六―五一一一

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛ご送付ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・株式会社光邦 製本・加藤製本株式会社
© Kōji Takazawa 1998 Printed in Japan

ISBN4-10-135531-2 C0130

新 潮 文 庫

宿

命

—「よど号」亡命者たちの秘密工作—

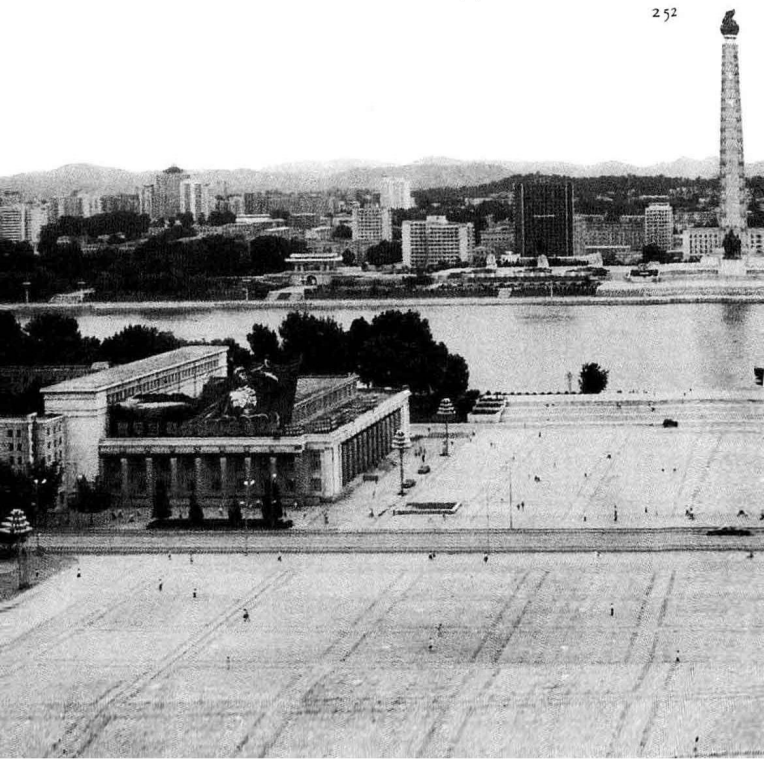
高 沢 皓 司 著



目

次

25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13
海上への脱出	思想対立	山桃の家	消息不明	背後の影	ウィーン工作	接線	双面のヤヌス	密輸シンジケート	チボリの夏	ロンドンの罟	生存の証明	マドリッドの失踪者
487	472	456	442	421	403	388	365	348	328	303	277	252



	26	破綻した虚構	501
	27	日本潜入	517
	28	密告	532
	29	国内工作	551
	30	撤回	576
	31	祖国喪失	593
	32	時間の迷路	617
	33	黙契	647
		エピソード	670
		あとがき	673
		地図	675
文庫版刊行に際して			676
解説 辺 真 一			



宿

命——「よど号」亡命者たちの秘密工作

—
F
U
^

プ ロ ロ ー グ

男がドアを押してひっそりと入ってきたとき、交替したばかりだった喫茶店の女性従業員は、ふと顔をしかめた。奥のボックスは、そこだけがほかの席よりも少し広くなっていて団体席ということになっている。男は入ってくるなり、ためらうことなくその席を占領した。今日もヒマな一日になりそうだ。店内をみまわすとアベックが二組、男の座ったボックス席の反対側に若い女性客が一人、いた。客といつてもそれだけだ。

グラスに冷水を注ぎ盆にのせたとき、その男の連れらしい二人目の男が入ってきた。どこか落ち着きがない。ボックス席の男を見つけると、そそくさとその男のななめ前の席にすわった。テーブルにグラスを運んでいくと、最初に入ってきた男がぶつきらばうに「コーヒー」とだけ言った。カウンターの奥にオーダーをつたえ、演奏の終了したレコードを取り替えおわって、何気なくドアの方を見ると、また新しい男客が入ってくるのが見えた。ボックス席の男たちと同じ仲間らしい。何かの会合だろう。従業員は、それきり客にたいする興味を失った。

気怠い時間が過ぎていった。何度かプレイヤーにレコードをセットし、ボックス席の灰皿を取り替えにいった。アベック客はとうに席を立てていたし、奥の席の女性客は、さつき冷水をもってテーブルをまわったときにそれとなく見ると、目を閉じていた。どうやら待ち人が来ないので居眠りを始めたようだ。

ときおり、男たちのテーブルから怒声が聞こえてきた。あたりかまわず大声で話す男が一人、いた。その声がたまにレジの方まで届くことがあったが、興味の持てる内容ではなかった。このころになると、男たちの数は一〇人くらいにふくれ上がり、途中で出ていったきり帰ってこない者もあったから、正確な人数は分からない。

従業員は生欠伸をかみ殺しながら、時計に目をやった。そろそろ今日も一日が終わる。国電が駅のホームに到着した音が聞こえた。従業員は帰るしたくをはじめた。すこし早目に店の看板の灯も落とした。レジに戻ってみるとボックス席の男たちが席を立とうとするところだった。さつきまでの大声とは裏腹にレジの前に立った男たちは妙に押し黙っていた。それが奇妙といえと言えた。

男たちが出ていくと、まるで男たちを追いかけるように、奥のテーブルにいた女性客が伝票をつまんで、あわててレジに近づいてきた。従業員は、香水の匂いとともに、かすかに消毒薬の匂いを嗅いだような記憶がある。

喫茶店は山手線のとある駅前でクラシックの名盤を聴かせることを売り物にしていた。そ

のころ都内にいくつもあつた名曲喫茶と呼ばれる店のひとつである。この店で、この日の時間帯にどんなクラシック曲が演奏されていたのかは残された記録もないし、従業員も記憶していない。一九七〇年三月一四日、大阪の千里丘陵で「日本万国博覧会」(EXPO'70)のオープニング・セレモニーが華々しく開催された日の夜のことである。

店ではレコードの演奏を客のリクエストに応じることであつたが、男たちの誰も従業員にリクエストを伝えたものはいなかつた。

とりたてて記憶に残るようなことは何もなかつたが、それでも従業員が記憶の底から細い糸をたぐり寄せるようにして、おぼろげにその夜の経過を記憶にとどめていることには、それなりの理由がある。その日からおおよそ三週間後、私服姿の目つきの鋭い男たちがやってきて、記憶の再現を従業員に強要したことがあつたからである。

黒い手帳を持つて訪ねてきた二人づれの男たちは妙に威圧的で横柄げうへいだつた。

「どんなことでもいい」

と、背の高い方の男が言つた。

「何を話していたのか覚えていないか」

そのことをしつこく訊かれた。

もう一人の猫背の男がイライラした気分を隠そうともせず、上着の内ポケットから何枚かの写真を取り出しカウンターにならべた。見たような顔もあつたが、そうではないような気もした。一度しか見たことのない人間の顔を、そんなに都合よく、正確に覚えていること

などできるものではない。

従業員は、ふと、あるとき男たちを追いかけるように出て行つた若い女性がいたことを思い出しかけたが、訊かれてもいないことを、自分から話す義理はなかった。

奇妙な男たちの一群が、山手線駅前の喫茶店の片隅で夜遅くまでなにやら議論し話し込んでいた日の夜から数えて、ちょうど半月後、日本列島を根っこから震撼しんかんさせるような大事件が突然降つて湧いたように起こつた。

三月三十一日、午前七時三〇分、羽田発の福岡行き日航機三五一便、JA八三一五、通称「よど号」が過激派学生らしい数人の男たちに乗つ取られたのである。

学生たちは乗員乗客一二九名を人質に取り「北朝鮮」行きを要求した。万国博開催でお祭り気分の盛り上がりはじめていた日本の津々浦々に、ニュースは鋭い亀裂きれつとなつて一瞬のうちに駆けめぐつた。ハイジャックという未曾有みぞうの重大事件を日本人はこの時はじめて経験した。その日から数日の間、テレビは絶え間なく乗つ取られた飛行機の実況中継をつづけ、人々は事態の進展に一喜一憂した。喫茶店の女性従業員も例外ではなかった。しかし、自分とはなんの関わりもないことである。

乗つ取られた飛行機は、何度かの膠着こうちやくと急転回をへて、事件発生から四日目の夜、北朝鮮・平壤ピョンヤンの美林空港ミリンに到着した。過激派学生たちによるハイジャックは成功した。

乗務員たちが「よど号」の機体とともに北朝鮮から日本に無事戻つてきたとき、人々はこ

れですべての事件が終結したと思った。大事件ではあつたが不思議とひとりの死者も負傷者も出ていなかった。そのことで、ようやく安堵あんどの胸を撫なでおろしたのである。

喫茶店の従業員も急速に事件のことを忘れていった。「よど号」の事件は四半世紀前の過激派学生による象徴的な事件として日本の戦後史に一行の記録をとどめる。

事件は終結したが、しかし「よど号」という物語は、それで終わったわけではなかった。

二五年後の冬、新聞がある男の死を伝えた。あのハイジャック事件のとき乗っ取り犯のリーダーとして北朝鮮に渡った男の名前だった。かつての名曲喫茶の従業員は、深い記憶の底から、その男の名前をたぐり出した。この男の名前だけは、おぼろげな記憶がある。

事件が起こって一週間もしたころだろうか。二人づれの刑事たちがやってきて、その男の名前を何度も口にした。あのとき、どんなふうに刑事たちに答えたのかは、もう忘れてしまったが、男のことははっきりと記憶がある。昔のことだ、と彼女は思った。もう、あれから四半世紀も時が経たつ。

不意に彼女は、二五年前のあの夜のことを思い出した。

男は、あたしがレジに立っていたときに一度だけ煙草たばこを買いに来たことがある。マッチを添えて渡すと、振り向きざまに、上野公園の桜はもう咲いているだろうか、と独りごとのように聞いた。あたしは、なんと答えたのだったっけ。たぶん、早咲きなら……、とか。あた

しは、そのことを誰にも話さなかった。猫背の刑事に訊かれたときにも話さなかった。自分でも忘れていたけど……。でも、あれはなにか意味があったのだろうか。

隅の席にいた女性が男たちのあとを追うように席を立ったとき、あたしはなんとなく疎ましかった。若い女の勘のようなものかも知れない。だからあたしは、意地悪く、睨むようにして女を送り出した。小さな嫉妬だった。

かつての喫茶店の従業員は、厭な古い記憶をもう忘れてしまいたい、というふうに首をふった。それきり、二度とそのことを思い出すことはなかった。

「よど号」事件とは何だったのだろうか。一九七〇年という、戦後五〇数年を過ぎた現在から振り返ってみると、ちょうどその分水嶺に位置する時代に起こったこの衝撃的な事件は、乗員乗客が解放され機体が無事に返還されてきたとき、本当にすべてが終わったのだろうか。「よど号」は事件から四半世紀が過ぎたいまもあてどのない迷走飛行をつづけている。ハイジャックのときのままに、航路図のない霧のなかを闇に向かって飛びつづけている。この「よど号」という物語に乗りあわせているのは、すでに幽明を異にした者も含めて、事件のときのままの九人の学生たちと、解放された乗客のかわりに、どこかで偶然にもこの物語にかかわりをもつことになってしまったすべての人々である。

「よど号」の真実という数奇な物語は、誰もが終わったと信じたところから、じつは本当の意味で始まっていたのである。

1 名曲喫茶

「よど号」の事件が起きて、ちょうど二〇年目の冬、わたしは小さな朝鮮民航機のシートに身体をもぐりこませてピョンヤンに向かっていた。その後、たびたび訪れることになる「平壤」への、最初の旅だった。

「よど号」で北朝鮮に向かった赤軍派学生たちの消息は、その頃まで断片的なもの以外は、ほとんど日本国内には伝えられていず、社会党の代表団などが短時間の面会でもたらした消息が国内に伝えられた情報のすべてだった。わたしは自分の目で彼らの消息と安否を確かめてみたかった。

この北朝鮮訪問を実現させるために外務省との面倒な折衝と手続き、特別な一次旅券の交付が必要とされた。北朝鮮側からの招請状も必要だった。受け入れ機関の招請状がない場合、外務省は北朝鮮渡航のための一次旅券交付に応じなかったからである。当時の日本国旅券にはまだ渡航禁止国として「朝鮮民主主義人民共和国」の名前が印刷されていた。——そして、この旅の半年ほど前、天安門事件の渦中から日本に帰国したばかりのわたしのもとに、